

鳥取大学附属図書館報 100号記念号



鳥取大学附属図書館報

Library

The Tottori University Library Information No.100

目

次

歴代館長座談会「本学図書館の来し方、行く末」	1
附属図書館報100号を記念して 道上学長	5
第23代附属図書館長として 高阪館長	6
「学術情報館」を目指して 宇田事務局長	7
図書館ファンクラブの準会員の立場から 永山教育地域科学部長	8
鳥取大学附属図書館報100号を記念して 能勢医学部長	9
工学部の学科図書室と図書主任会 木山工学部長	10
21世紀電子図書館に向けて - 図書の集中管理とふれあいの場に - 岩崎農学部長	11
図書館はコワイ！？ 國歳眞臣教授	12
図書館は今 平井和光教授	13
外部記憶の本、思い出の本 井須尚紀助教授	14
「大学図書館の組織改革と近代化」のための提言 山崎良平教授	15
掛け軸と図書館 久野初代事務部長	16
学生と図書館 - 鳥大図書館の発展を祈念して - 田村第二代事務部長	17
本学図書館への警鐘 東海 現事務部長	18

歴代館長座談会 「本学図書館の来し方、行く末」

出席者氏名

第17代館長 坪倉 操(S64.1.1~H2.12.31)
第18代館長 川越治郎(H3.1.1~H4.12.31)
第19代館長 赤木三郎(H5.1.1~H6.12.31)
第20代館長 三枝圭作(H7.1.1~H8.12.31)
第21代館長 甲元啓介(H9.1.1~H10.12.31)
第22代館長 木地實夫(H11.1.1~H12.12.31)
第23代館長 高阪一治(H13.1.1~現在)



高阪館長：本日は平成の初めから館長を歴任された諸先生にお集まりいただきありがとうございます。



今回の主旨は図書館の「来し方、行く末」を考えるということです。

外部評価や国立大学法人化を間近に控え、館報が100号を迎えるに当たって、図書館の歩みを振り返りながら、お知恵をいただき、今後の図書館を考える縁としたいと思います。

図書館の基本的な役割は、本学の教育・研究のニーズに応じて支援すること、国有財産である所蔵資料を地域の方々の生涯学習などに利用していただくなどの地域への貢献があげられます。

一方で、提供する資料はデジタル資料が増えてきており、学内資料の学外への発信やITによる大学間の連携、公共図書館との協力推進など、大学全体の自己改革に伴い図書館も高度なサービスに向けて自己改革を行ってきています。

独立行政法人化を目前に、図書館はどうあればよいかについて、お知恵・ご意見をいただきたいと思います。

まずは東海部長から図書館の現状と課題について述べさせていただきます。

東海部長：歴代館長先生のご努力の成果の上に、図

書館が今まで何を、どんな成果をあげてきたのかをご説明致します。

まず、組織・運営面ですが、図書館委員会の規定を見直し、館長指名の委員を任命できるなどの活性化を図りました。

次に図書館基本問題検討専門委員会を新規に立ち上げました。

事務部門の組織再編のために業務改善の検討を進めております。

11月には、平成9年に引き続き、第2回の外部評価を行います。

次に施設・設備面については、平成15年度概算要求に、情報化推進のため、大学教育総合センター・総合情報処理センター・図書館を統合する“学術情報館”を要求しています。

情報メディアルームにプリンタを4台設置し、出力の面でも学生を支援しております。

貴重資料室・郷土資料室の設備を充実させ、郷土資料室を開放しました。

次に図書館サービスの充実強化についてですが、試験期の開館時間を延長し10時までとしました。図書の実用ということで学長裁量経費を得て教養文庫を設置いたしました。

貴重資料や廃棄図書の規定を設けました。

電子図書館構想の推進ということで

は、重点配分経費、391万5千円が配分され、1年間で6万冊の遡及入力を行う予定で、うまく行けば2、3年で完了するかもしれません。

また外部経費による貴重資料のデータベース化も計画しております。

教官当り校費0.75%で購入しているCurrent ContentsとMEDLINEは当分の間継続することになりました。

電子ジャーナルは3カ年間、年590万円の予算がつき本年度から購入していません。

図書購入依頼・文献複写依頼が研究室からオンラインを利用してできるようになりました。

地域社会との連携では、各公民館、公共図書館に学外者用利用パンフレットを配布し、昨年9月には鳥取環境大学と利用協定を結びました。

また去年10月に鳥取県大学図書館等協議会を発足させ、毎年秋には貴重資料の公開展示をしております。平成12年から湖東中学校の生徒を職場体験実習で受け入れ、今年から附属中学校の生徒も受け入れる予定であるなど、地域の小・中学校との連携を図っています。

鳥取県立図書館とも、資料の横断検索の可能性について協議するなど、相互協力を密に行えるよう、今後実務者会議を開いて話合っていくことになりました。

本年6月には本学が当番館となって全国規模の国立大学図書館協議会総会が鳥取市内で開催されました。

高阪館長：ではここで歴代館長の自己紹介をお願いしたいと思います。

坪倉氏：私が17代館長で在任していた時は、電子図書館の話が出始めた頃で、遡及入力はこの時は無理だったので、新しく購入した図書についてデータ入力していくことになりました。また、ブックディテクションシステムを採用し、教官著



作図書コーナーを新設しました。

川越氏：18代館長在任中にILL制度を導入しました。地元の企業などでは社内にはない文献の入手はどのように行っているのか疑問を持ったことがあります。



大学の図書館がそのような時に利用してもらえるようにPRする必要があるのではないかと思います。

赤木氏：私が19代館長だったところと比べると館内もIT化が進んでいるように思います。

三枝氏：私が就任した平成7年に部課長制が始まりました。

その時に新図書館構想を引き継ぎましたが成果をあげられませんでした。

現在は鳥取大学と島根大学で教えていますが、島根大学の図書館はとても充実していて、どういう訳なのかと思っています。

甲元氏：私が在任中、Current Contentsが2分野だったのが全分野に、学内から自由に利用できるようになりました。

Current ContentsやMEDLINEなどは学外にいとアクセスするのに料金がかかり不便を感じますので、そのあたりが情報へのアクセスのポイントになるかと思っています。

在任中に新図書館構想のプランを作りましたが実行はできませんでした。

木地氏：私が在任中、経費を各学部からもらいCurrent Contentsを本格的に導入しました。

現在は電子化が進んでいるようなので、具体的に見せていただきたいと思います。

学術情報館という構想はすばらしい、期待しています。

今後は冊子体の資料とデジタル資料のバランスをどう取っていくかが問題になるのではないかと思います。

高阪館長：諸先生方現在中の図書館の様子をお伺いし、図書館の抱える問題もお伝えしまし

たので、ここで歴代の館長先生の図書館に対する思い入れをお話いただき、後輩に対する忌憚のないご意見をお願い致します。

川越氏：私がまずやりたかったことは学術雑誌の集中管理でしたが、学部によって考え方が全く違い、はねつけられました。

私自身それまでは学科で取っている雑誌以外は見たことがありませんでしたが、ILLで依頼が来て研究室に借りに行くようでは効率の悪いことだと思います。

高阪館長：大学全体で資料の有効利用を図ることが必要です。

OPACで所蔵研究室がわかって、学生から見れば研究室というのは敷居が高くあきらめてしまうようです。

資料購入の財源は国のものなので、基本的には集中管理がいいと思いますが、全部というのは現状では無理だと思われる。

図書館の位置づけにも学内でばらつきがありますし、研究者の使い勝手をどう測定するかということも問題です。

今までは国立大学には図書館を置く法律に定められていましたが、独立行政法人化後については来年1月の国会で決められます。

集中管理については財源・政策的な面からも考える必要があります。

私は副学長として全学的にIT化を進めていく立場におり、教官と事務官によるIT委員会で方策を図っているところです。

川越氏：総合情報処理センターを大きくして教育機能を持たせたようなものが学術情報館のイメージでしょうか。

甲元氏：セキュリティの問題はあると思いますが、学内LANを無線LANにする話はありませんか。



高阪館長：ただ今IT委員会の小委員会で模索しております。

図書館職員にも情報処理能力が必須になるでしょう。法人化後に、スペシャリストを登用し給与に格差を設けるという話も人事院から出ています。

坪倉氏：雑誌の集中管理の話が出ましたが、現在雑誌の購入は減っているのでしょうか。

木地氏：Chemical Abstractsはどうなりましたか。

東海部長：雑誌価格の高騰により雑誌の購入は減ってきており、Chemical Abstractsも購入中止になっております。

赤木氏：鳥根大学附属図書館にいい本があるのは図書館が財政的に保護されているからでしょう。

鳥取大学附属図書館でも財源の確保ができないでしょうか。

三枝氏：在任中に私も気になったが実現できませんでした。



川越氏：本質的に集中管理か分散管理かという問題です。

鳥根大学と鳥取大学全体の所蔵リストを比較するとあまり変わらないかもしれません。

図書館にあるか研究室にあるかの違いかも。私は図書も含めて集中管理を行っている筑波大学に2回見に行きましたが、書架が増設されており、集中管理を行うと図書館の建物を無限大に大きくする必要がありす。

高阪館長：鳥根大学と本学資料の充実の差を考えると、鳥根大学は前身に旧制高等学校があるという歴史的な背景と文系の学部が多いという違いもあるのではないのでしょうか。

赤木氏：教官研究費は、実験器具を買うのも図書を買うのも自由なので、図書館を充実させる為には集中管理が必要だと思っています。

小規模な図書館がたくさんできても仕方がないので、教官や学生がいつでも資料を利用できるように、将来、図書館がどうあるべきかを主張して頂きたいと思っています。

三枝氏：強制的に何%かを教官研究費から出してもらっても集中管理についても、教官の反対が強いでしょ。

図書館は部局でありながら教授会を持っていない弱さを感じます。

高阪館長：資料の集中管理はそれに見合ったスペースが必要ですが、予算措置を臨機応変に出来ません。

ホームページに利用者から図書館に対する苦情、要望とそれに対する回答を載せておりますが、見たい本が無い、本が古いという意見が多く寄せられています。

研究室から本を戻してもらうのにも書架が必要です。

基本的には集中管理を目指し、研究室でも資料が利用しやすいようにすることが大事ではないでしょうか。

川越氏：私は大学を辞めてからもレファレンスブックを利用しに来ますが、資料が古くなっていたり、更新すべきものをしていないものが多いように感じます。

Current Contentsが研究室から使えるようにはなりましたが、教官が図書館に立ち入らない状態を作っているようにも思います。

鳥取大学の教官は図書館を利用しない方が多く、そういう方が図書館委員会で発言をされる。

集中管理というのは教官に図書館に足を運んでもらうという意味もあります。要は皆さんの利用しやすい図書館を作るということです。

木地氏：学術情報館をよい機会に集中管理が行えるといいと思います。



高阪館長：図書館単独館ではコストが割高になるため、経費を導入するなら総合情報処理センターなどと統合した施設の方がよいということで頑張っていますが、他大学も頑張っているため予算化は難しい状況です。

法人化後は莫大なお金をかけて図書館を整備している私立大学と競争をして、

学生募集や学生サービスを行っていかねばなりません。プライオリティを考える必要があります。

木地氏：図書館は大学の顔だと言いますが、電子ジャーナルはどうなっているのですか。

東海部長：Elsevierのライフサイエンス系、これは他大学とコンソーシアムを組んで、他大学が購入している雑誌も無料で見られるようになっています。

その他Science、Natureなどが、学内の各研究室などから見られるようになっています。

赤木氏：特別予算が遡及入力についてということ早く資料を活用するためにどんどんやってほしいと思います。



旧書庫にはいい本がたくさんあるので集中的に整備しアップグレードしていくべきだと思います。

福島課長：本年度は旧書庫の整備を中心に行う予定です。

現在は入力業者の契約準備中で9月から実際に行います。

赤木氏：旧書庫のものは独自の分類を付けているものがあり、分類をどうするのが良いのか等、管理の方法を考える必要があります。

川越氏：坪倉館長の時から新刊はデータ入力していますが、研究室の分はどうなっているのでしょうか。

高阪館長：新規購入分の入力が始まる以前のものはまだ入力できていません。

県立図書館との連携のためにも遡及入力が急がれます。

それでは、予定の時間がまいりましたので、これで懇談会を終了いたします。

寄せられました貴重なご意見等は今後の図書館運営に反映させていただく所存です。

最後になりましたが諸先生のご健康とご活躍を祈念して、閉会の挨拶といたします。

(平成14年8月8日開催)

附属図書館報100号を記念して

道上 正規



最近では、年に2回この附属図書館報が出版されていますが、1970年の創刊ということなので、創刊以来3分の1世紀が経過した事になります。この間、歴代の図書館長を始め、多くの館員とそれに図書館の運営に携わってきた図書館委員の先生方の地道な努力に対して、心より敬意と感謝を申し上げたいと存じます。

図書館は、大学のアカデミックセンターとして位置付けられてきているが、その割には、予算、施設面積や人員に関しても、大学の中でも十分な手当てがされてこなかったように思われます。と言うのは、学部自治の強い大学の中で、大学の公共セクターへの投資や支出は抑制され勝ちであったように思います。この原因は文教予算の貧困にあることは言うまでもありませんが、個々の教官の教育研究活動において、図書館の存在の重要性が必ずしも評価されていなかったのではないかと思います。以前は、学科や研究室で購入する図書の登録が図書館の主な仕事であると考え、その登録の時間のかかることに何度も苛立ちを覚えた事があります。

しかし、現在では学外からでも、鳥取大学のホームページにアクセスして、図書館のサービスを受ける事も容易にでき、学生や市民からも喜ばれていると聞いています。このように、ITの進歩によって大きく変貌してきたものに、

図書館の機能を挙げることができます。換言すれば、図書館は情報ネットワークの館であり、必ずしも蔵書数の多少で競うのではなくてきた。情報ネットワークを使って、利用者にいかにスピーディにサービスを提供するかが問われる。そのためには、総合情報処理センターと図書館が共同して、将来を見とおした学術情報センター構想を立ち上げるべきでしょう。

次に、図書館は学生の学習環境の場としての機能の提供も重要である。最近では、試験シーズンともなれば夜遅くまで電気がついているが、日常的にも学生にもっと利用してもらおう工夫をして欲しい。学生の予習・復習やレポート作成の場として。場所によっては、リラックスした雰囲気の中で学生が勉強したり、談笑できる所も欲しいように思う。

さらに、図書館は地域の文化の拠点であり、また文化情報の発信源となって欲しい。現在進められている地域の図書館連絡協議会などをさらに発展させて、文化情報のネットワークを構築して、市民を巻き込んだ活動が欲しいように思う。そのためには、図書館に多くの市民が足を運ぶような仕掛けを作らなければならない。これも地域貢献の大きな仕事である。

しかし、こうした活動を充実させようと思えば、予算や人員が問題になる。そのために、図書館の評価を第三者から受けると同時に学内からも受け、新しく変わっていかこうとする図書館の姿を理解してもらおう努力が欠かせないと思われる。

30年余の歴史を踏まえて附属図書館のさらなる飛躍を期待して、100号のお祝いとします。

(学長)

第23代附属図書館長として

高 阪 一 治



鳥取大学附属図書館報が1970年に創刊して、今号で100号を迎えるという。そしてわたくしは附属図書館長としては23人目に当たるという。歴史を顧みていささかの感慨なしとしないが、ここでは、目下の本学附属図書館の取り組みの一端と、近時、胸中を去らぬ思いについて記してみたい。

現在、附属図書館では、図書館委員会の傘下に基本問題検討専門委員会を設けて、委員の諸先生、館員一同、一丸となって、国立大学法人化にむけての中期目標・中期計画の策定に取り組んでいる。これを機会として、これまでの本学附属図書館の歩みを総括しつつ、問題を洗い直し、その克服に向けて、今後の展望を切り拓かんものと、ほとんど毎週、鋭意検討しているところである。頭の下がる思いである。

そこから浮かび上がってくるものは、やはり、本学附属図書館の主たる任務である教育研究の充実への支援と地域貢献を果たすために必要な、人的・物的・財政的基盤の確立という基本問題である。たえずこの基本問題に取り組み、その改善を図って、利用者に必要な質量ともに充実した図書館資料の収集整備と、専門性の高い、迅速、的確なレファレンス・サービスの提供を目指すことこそ、本学附属図書館の進むべき道だと思われる。

今後、大学に求められるものは、世界の大学に伍してゆける国際的競争力と、そのための「基礎体力」である、と言われる。この「基礎体力」のひとつとして、欧米の大学における教育研究を支え、推進してきたものの重要な一つが、大学図書館であったことは、もっと知られてよい。高度な学術研究と教育において国際的競争力を言うなら、大学図書館の存在と力量を抜きにしては語れないであろう。

学内における学部構成がいかなるものであろうとも、高度な専門的知識に裏付けられた研究教育と、真の意味での豊かな教養・素養・品格・人間性の養成といったものが、ますます大学に求められるであろう。このとき、図書館資料は「知の遺産」というにとどまらず、知的創造と「人間への洞察」を触発する宝庫に変わるであろう。図書館人に課せられた使命は重いのであり、いっそうの資質の向上が求められる。司書に期待するところは大きい。

(副学長・附属図書館長)



「学術情報館」を目指して

宇田 誠



私はかつて、学術情報センター（現：国立情報学研究所）の創設期に会計課長として、学術情報の基盤整備の仕事をしたことがある。そのひとつに、全国の国公立大学の附属図書館（以下「図書館」という。）と学術情報センターがネットワークを組み、図書等の目録所在情報データベースを作る仕事があった。その結果、研究室等にいながらにしてパソコンで目録検索を行い、図書等の所在情報が容易に把握できるようになったもので、図書館の情報検索利用は格段に便利になったといえる。また、一方でより一層の情報化がすすみ、今日では多くの図書館が「電子図書館」化への取り組みを行っている。本学でも、電子図書館の機能を盛り込みながら、学術情報の総合センターとしての「学術情報館」への取り組みが、館長のご指導の下、館員一丸となってなされていると聞いている。

ところで、大学改革の推進や国立大学の法人化への取り組みがなされているとき、図書館は、今後、さらにどんな役割を担って行くべきだろうか。このようなことは門外漢の私が考える前に、既に図書館関係者の間で取り組まれていることを承知の上で、利用者の立場から具体的な提案をひとつふたつしたいと思う。

ひとつは、最近、若者の活字離れや一般的な教養知識が十分ではないのではないか、と言わ

れているが、これらを少しでも解消するため、図書館に先生方の推薦書「教養図書百選」なるものを置き、感想文を自由に出させ、優秀者を表彰する仕組みを作ったらどうだろうか。

もうひとつは、地域社会貢献の観点から、図書館で収蔵している貴重な資料（史料、貴重書等）を、館内展示だけではなく街なかのデパートなど、人が多く集まる場所で年に一回ぐらい展示会を開いたらどうだろうか。このようなことは、最近、市町村でも出前図書館として、子どもたちに利用提供している話を良く聞く。図書館ではそこまでするのは難しいと思うが、出前展示会は可能性があるのではないかと思う。

これらは既に某国立大学附属図書館で実行されており、多くの人々の関心を集めているようである。図書館は情報の宝庫である。情報の集積だけではその役割の半分しか達成していないと思う。これからは積極的に利用されるような方策を考え、学生、教職員、地域社会の人々など誰からも利用されることにより、より一層の存在感を主張していくことが必要ではないだろうか。館員一同の奮闘に期待するものである。

（事務局長）

図書館ファンクラブの準会員の立場から

永山正男



鳥取大学附属図書館報が100号を迎えると聞きました。随分前に図書館の建替の問題で、全国の図書館を見て歩いたことを懐かしく思い出します。結局、私たちが作成したプランは実現しませんでした。その頃考えた図書館の課題は、多くの関係者の努力にもかかわらず、今も残っていると思われる。当時、現図書館長は図書館を何とかよくしようと非常に熱心で、私たちは図書館ファンクラブの会長さんと呼んでいました。私は、いろいろと関心が移りましたので、準会員というところです。

附属図書館について、私には相反するかもしれない二つのイメージがあります。ひとつは、例えば広島大学の図書館です。図書館員数を抑える目的の立方体の建物、四階までの吹き抜け、充実したバックヤードなど、建築家の手によって合理的に設計されています。これにコンピュータによる検索などがプラスされていかにも現代風の図書館です。そういえばいろんな掲示も電子化されていました。

もうひとつは、神戸大学の文系キャンパスにある図書館です。図書館に入るとすぐカウンターがあり、すべて閉架になっています。図書館員に相談しながら本を探すことになりませんが、適切な助言を期待することができました。私が学生時代をおくった九州大学法学部の図書館に

も似たところがあります。院生は書庫に入ることができましたが、鳥取大学で言えば旧書庫に近い感じで、狭いスペースに数十万冊がありました。本を探しめぐねると、何でも知っている司書の女性に相談すればすぐ解決しました。

政治学の教育・研究を担当する私の立場では、<研究>については現代的な図書館でなければ勝負できないという思いがあります。図書館に<情報>を求める時、古色蒼然たる図書館には期待できません。しかし、<学問>とか<教養>とかいう言葉で考えるとき、私が図書館に求めるのは単に<情報>ではありません。その時は、旧書庫に入ったり、出身大学の書庫を懐かしく思ったり、<薔薇の名前>の迷路に身をうずめたくくなります。

結局、二つのタイプの図書館を二つとも欲しいのです。建替の構想でも、冗談半分に中心に管理棟があり、両脇に情報館と古典館の二つのタワーがあるなどという構成を考えたことがありました。私のような利用者は勝手なことを言いますが、附属図書館はその中にある図書館にとって本質的なことを是非受け止めていただきたいと思います。

私は、まだファンクラブの準会員にとどまっています。後ろの方からですが、ファンクラブの活動に参加するつもりです。(教育地域科学部長)

鳥取大学附属図書館報100号を記念して

能 勢 隆 之



鳥取大学附属図書館報100号を発刊することになったことは、御同慶のいたりであります。

米子地区に鳥取大学附属図書館分館が開設された当時は、その建物は小学校の校舎を改造した木造であり、図書は主に医学関連図書が置かれていました。特に、製本された洋書が本棚にならんでいるのをみると、すごいことと思った記憶があります。自分の研究した内容が活字になることを夢みて自分も研究成果を発表できるようになるうと思ったものです。

その頃は、活字になれば研究成果が世の中に認められ、定説になったことの証しと思っていたことと、世間も活字になったことは、正しくて中心的な考え方と信じる傾向にあったと記憶しています。また、図書館も多数の蔵書があることが、その格を表すと評価されていたため、少しでも多くの図書を収納することに努めていたし、今日でもその評価基準は変わっていません。

しかし、時代の変遷とともにニューメディアの発展等により、活字がないペーパーレスの情報を提供する電子図書館の構想が、日常的になりつつあります。活字図書による情報とは比較にならないスピードで情報や研究成果が流布し、情報の入手も便利になりました。活字図書であれば十分に吟味されたものが出版されたわけで

すが、ややもすると電子情報はチェック機構が不十分になりがちで、未訂稿の情報が一人歩きをし、その上、場合によっては正論になってしまうことがあると考えています。しかし、この動向に逆らうことは、現代文明に乗り遅れることであり、化石になることだとも感じています。

米子キャンパスにも早晚、電子図書機能を備えた図書館建設が必要であり、急務なこととさえ考えています。もう一つの新しい動きは、学生の講義にもノートパソコンが導入されることとなり、学生一人一人にパソコンを所持させ、講義を受講する時代がやってきて、授業方法も変わり、ペーパーレスはより一層進行すると思います。

今では、図書館に行き、本の貸出しの手続きをして、借りた図書を閲覧室で読んだり、そこで友人と一緒に勉強したり、必要なときには厚くて重たい本を家まで持って帰って勉強しています。そこには、図書館と自分との間に人間関係が存在しています。ペーパーレスが進行し、電子図書館になると老婆心かもしれませんが、人間関係と人の心をもった憩いの場としての図書館機能がうすれていくのではないかと不安がよぎります。

今後は、いかにメディアが発展し、新しい情報社会になっても、図書館に行けば、憩いがあり、ゆとりがあり、人の心と人間関係のある構造と機能を維持すること、そして人間が活用する場としての図書館機能を持ちつつ発展することが大切であることを、附属図書館報100号の発刊という節目にあたり感じています。(医学部長)

工学部の学科図書室と図書主任会

木 山 英 郎



工学部には学科毎に学生も自由に利用できる図書閲覧室がある。専門分野の洋雑誌、和雑誌の新刊と製本されたバックナンバーが揃っており、ハンドブック類や全集類、規格・基準図書類など、基本的な単行本もおかれている。書庫と閲覧室を備えて、小さいながらも学科図書室の役割を果たしている。

この制度ができたのは昭和47年のことであるから、工学部の成長に合わせてざっと30年の歴史となる。それまでは、個人、研究室、あるいは学科で使用するために購入した本は、附属図書館本館の貸出簿に購入者個人の名前で判を押して、研究室等に持ち帰って所蔵する方式であった。これは先行する教育学部、農学部の、研究室毎に図書を購入・使用する習わしに拠ったものである。

これを工学部では学科単位で借り出して、学科図書室（図書閲覧室）で管理するのが基本とし、必要なら学科の管理責任で各研究室に移管する方策を含めて図書閲覧室方式としてお願いした。図書の共同利用と事務の合理化を旨とする。新米の工学部がこれまでの慣習を変更しようとするのであるから、実現するまでには相当な反対意見もあって難航したことをぼんやりながら覚えている。

さて、図書の借り出しの際、学科を代表して貸出簿に判を押す、その後の図書管理の役割を果たすのが各学科1名当て設けられた図書主任である。その工学部内の連絡、調整、提言のための委員会が図書

主任会である。当時は、図書の1冊毎に貸出簿に判を押す都合上、その交代は大変な作業となるため、通常の委員会と違って任期は無期限とされた。その結果、ほぼ同じ顔ぶれが10年、20年と続いたものである。

年3・4回の主任会は定例の学生用図書の選定から、学科図書室の課題、附属図書館の予算や基本的なあり方まで、年度をまたがって息の長い議論を繰り返してきた（輪番制で図書館委員になり、全員が附属図書館の状況にも通じ、その動向には敏感であった）。かくして、附属図書館や学科図書室あるいは学生用図書のあり方についての工学部の考え方には、長年図書主任を務められた川越治郎先生、加藤益先生、中島路可先生、等々、先輩先生方から今に受け継いできたものが少なくない。

残念ながら最近では、図書主任が1、2年で次々と交代する学科も現れて、この主任会の雰囲気も過去のものになりつつある。肥大化した学生用図書の選定方針、各学部蔵書のデータベース化のための遡及入力、あるいは学会誌・論文集の電子情報化への対応など、工学部が率先して当たらねばならない課題山積のこの時に、工学部最強の支援部隊の消失は大いに痛手となる。願わくば、かつての工学部図書主任会の再興を期待したい。

附属図書館においても、電子情報化の時代に入るとともに、独立行政法人化という経済効率と合理化を求める時代を迎えて、大学図書館のあり方が一変する可能性も否定できない。そんな折から、図書館委員会の下に各学部の図書主任会を構成し、常時附属図書館への関心を高めると同時に、事に当たって各学部の意向が正しく反映できるように、学部に根を張った下部組織を整えることが肝腎と思われる。

（工学部長）

21世紀電子図書館に向けて — 図書の集中管理とふれあいの場 —

岩崎正美



180度向きを変えてもライブラリと読める図書館報が、記念すべき100号の発刊を迎えた折りに投稿の機会をいただいた。

私の図書館への思い出は、パソコンやワープロがまだ普及していない25年ほど前のことである。当時農学部は、図面を縮小できる複写機を備えてなく図書館にあった。学位論文の作成のために、墨入れした手書きの図面数十枚の縮小を館員にお願いした。鮮明な縮尺図面が館員のつきっきりの操作によって、次々とできあがっていくのを、そばで感謝とともに感嘆しながら眺めていた覚えがある。

今ひとつの思い出は、1990年に在外研究でカリフォルニア大学デービス校に滞在した時のことである。日本の新聞が読みたくて広大な構内を自転車に乗って図書館通いをした。その地下1階には各国の新聞が備わっており、日本からの在外研究者とその家族、留学生などを時折見かけた。この図書館の新聞コーナーを通じて、デービスに滞在している日本人とも知り合いになれた。

ところが今や情報関連の進化はすさまじく、パソコンによってデータから図面はもちろん、縮小拡大を含め、いとも簡単に作成できる。かつての図表の下書きをもとに黒インクでの墨入れ作業は過去のものとなり、製図用具は研究室のロッカーに眠ったままである。世界のニュース、新聞情報も瞬時に入手できる時代になった。図書館に導入しているOPACの検索システムをはじめ、研究室にいながらにし

てあらゆる知的情報を労せずに入手できる。鳥取大学で開催された国立大学図書館協議会の報告によると、ライフサイエンスの電子ジャーナルが国立大学の図書館に導入されつつあるようで、今後ますます図書館に足を運ぶ必要性は少なくなりそうである。最近でもたまたま館員が購読雑誌のバックナンバーをコピーするため研究室に訪れることがあるが、これも必要なくなるであろう。

デービス校で世話になった教授の狭い教官室には、論文の別刷りや所属学会関係図書と学生のレポート、パソコンとソフトに関する図書が主で、専門書はあまりみななかった。かれらは普段から図書館を利用したり、パソコンで文献検索をしているからであろう。手元に本を置く必要がないのはうなずける。我々は関係する本をいつでも読めるように、ごく身近に置いておこうとする。これからは電子ジャーナルの普及とともに図書館の書庫面積を拡充して、研究室の図書を集中管理していくべきだろう。それによって教官研究室のスペースを確保でき、よりよい環境づくりができる。

近年、学生、教職員の多くが、パソコンに向き合う時間が長くなり、会話をはじめとする人間的交わりがだんだん希薄になっていく印象を持つ。これも情報化社会がもたらした一つの弊害といえるであろう。知の中核としての図書館が、電子図書館に目標をおくならば、この21世紀、図書館の役割は知的ふれあいの場として地域の人々にまず開放すべきであろう。それによって地域住民と大学人、なかでも留学生との交流を通じて生きた語学の研修の場、さらには各種行事、公開講座やその情報基地としての役割を持たせ、地域や国境を越えた人間同士のふれあいの場として、大学のハブに成長して欲しいと願うものである。

(農学部長)

図書館はコワイ！？

國 歳 眞 臣



この度高阪図書館長より鳥取大学附属図書館報が、1970年の創刊以来百号を迎えた記念号に何か書くようにと依頼された。テーマは指定せず、「事情ご賢察の上、ご高配賜りますよう・・・」とのこと。「論文を一つ・・・」というのであればまだしも、こういうのが私には一番苦手な原稿依頼である。

とはいえ、先ずは百号発刊おめでとうございませう！ところで、1970年といえば、私がこの鳥取大学に奉職した年である。当時私は未だ独身であり、この山陰鳥取という未知の世界で行く所もなく、唯一身の落ち着けるところは、研究室と図書館しかなかった。特に私にとって、大学の顔というべきものは図書館であり、この顔がいかに知的容貌と知性を示しているかを確かめることが一番の関心であった。

1970年4月に、私は鳥取大学附属図書館を訪れ愕然とした。その書物の種類、数量の少なさ、特に総合大学の図書館には必ず存在しているはずの社会科学系の、人文科学系の書籍がほとんど見あたらないことに。言い換えれば、鳥取大学のアカデミックな教養度、品性を示すものを感じるができなかった。こうした状況の下で、総合大学としての「知的創造」に取り組むことは、ほとんど不可能に近く感じ、鳥取へ来ざるを得なかった不運（「大学院時代にもっと真剣に研究に取り組むべきだった」という後悔とともに）を嘆いたものであった。

さて私も、後1年半ほどでこの大学を去ることになった。鳥取大学附属図書館も、その後約32年の間

に、充実してきたのは確かである。年々質量ともに充実してきていると思う。とはいえ、それは32年前と比較しての感想である。というのは、私が学生として学んだ東京三田の大学図書館、内地研究で利用した神大図書館、在外研究において私を圧倒したドイツの大学の図書館等々と比較すると、何か未だ満ち足りないものを感じてしまうのである。

要するに、私がこうした他大学の図書館で実感したのは、「本に食われてしまうのではないか」と感じさせるほどの大型本のもたらす恐怖感であった。この恐怖感が、本学の図書館には存在していないのである。

たしかに、32年前とちがいで、自然科学系だけでなく人文・社会科学系の書籍も増加し、多種多様な書物がそろえられてきた。しかし、容器としての完成度を考えるならば、やはりここを訪れるものを呑み込む吸引力を大学図書館は備えているべきではないだろうか。読むものを頭から食い尽くし呑み込もうとする強力な容器、それに対して食われてなるものと格闘する読者。要するに、われわれはこの大型本の上でさまよい、かつ溺れまいと泳ぐのである。

もちろん荒俣 宏が指摘するように、最近の新刊書は「単にペーパー・メディアではあっても、書物であるとは言い切れない」ほど、質量ともに軽量化している（彼は、こうした状況を「書物の宇宙の縮小化」と嘆いている）のも事実である。それゆえに日常的に自宅において、あるいは車内で、というように、場所を問わぬ動的読書は仕方がないが、やはり「食うか食われるか」と格闘できる場所で大学の図書館はあって欲しいと私は思うのである。そうしてそのためには、「大型本」をという私の願いは、やはり老人の戯言であろうか。

（教育地域科学部 教授）

図書館は今

平井和光



今の国立大学医学部は、法人化へ向かって喧騒の中にある。我が鳥取大学医学部においても然りである。学生教育では、従来の「何々学」が否定されて臓器別に臨床に力点を置いた教育のコアカリキュラムが全国的に統一された。それを学生に対してチュートリアル教育という少人数のグループ教育にて、学生の自主性を重んじて教育の場を設定して教官が教育しようというのである。よって教官の専門分野とは直接関係の無いところで教育しなければならない状況が生じて来るであろう。従来の教官の研究成果の派生としての独自の教育内容は影をひそめ、全国的に画一化され、全教官が臨床医の育成のために臨床に傾斜した教育へ動員されることになる。即ち、医学部は臨床医師養成学校化の道を邁進することでその責務を果たすことになる。一方、卒業し、独り立ちした医師は、2年のローテイト研究を修了した後、臨床教室に所属し、臨床専門医を目指して臨床技術の修得のため競争的環境の中に身を投ずることになる。しかしながら、当校では各教室10名足らずの教官数でこれらを支えねばならず、マンパワーは厳しいものがある。また、研究を志向するには学部教育ではなく、大学院教育に求めようとする方向にある。これも当然といえば当然である。従来は学部教育の中に研究志向の学生を育てようと努力し、研究の活力を学内に求めてきたのが地方大学であった。しかし、今後は研究の活力を学内のみならず広く学外に求め、学外から研究者を集める力量が求められることになる。即ち大学間競争である。中央の大学が大学院大学に衣替えする中で当校でも独立専攻

大学院を立ち上げ、競争に耐えうる研究環境を形成しようとしている。しかしながら競争には勝つための主体的力量とその主体的力量を向上させるための客観的条件の両者のバランスが要求されるが、地方大学の客観的条件はあまりにも貧弱である。現状では人の流れは決して中央から地方に流れるのではなく地方から中央に流れるであろう。即ち理念としては大変妥当であるが、理念を現実のものとするに当たっての客観的条件があまりにも貧弱であり、理念の現実化が厳しいのが地方大学の置かれた現状である。

このような状況にあって、図書館という機能が今後いかなる役割を担うことが求められるのか？またその役割は大学に平等に必要なのか、中央のステーション大学に集中することで事足りるようになるのか？ここにも競争的環境が存在するのか厳しい課題が突きつけられよう。学生のチュートリアル教育に対応できる図書館機能、当大学の特徴ある研究に収斂した文献、図書の収集など学部の個性を創造する図書館機能を創出する必要が求められよう。教育研究支援としてオンラインジャーナルの配信、文献検索システムの提供のみならず、従来の図書閲覧、学習室的機能、情報検索機能を学生教育のために図書館が担いつつ、大学のあらゆる資料を図書館が管理し、アーカイブ機能を持つことになれば新たな機能の展開が可能となるかもしれない。即ち、社会へ開かれた大学の窓口として図書、文献情報のみならず大学機能の情報発信を担うことで新しい図書館機能が見えてくるかもしれない。いずれにしても図書館が大学の教育、研究支援部門として今後機能するには図書の閲覧、貸し出し機能を中心とする機能から情報の検索、収集処理と発信機能を兼ね備えた組織に発展することが必要視されるのではなかろうか。法人化という喧騒の中で教官、学生のための快適な教育・研究環境を作り上げるために図書館の未来を創造すべくじっくりと討議するときに至っている。

(医学部 教授)

外部記憶の本、思い出の本

井須尚紀



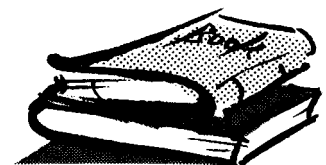
図書館の新作図書コーナーで懐かしい本を見つけた。「不思議宇宙のトムキンス」。以前、白揚社のガモフ全集の中にあつたトムキンス・シリーズを加筆改訂したもので、訳者が言うように“50代以上の科学者や科学ファン”ならずとも、読み返してみたくなる本である。早速、書店に発注して購入した。その前に同コーナーで見つけたのが「パーセプトロン」の増補改訂版。訳書では難解なところも訳者の違う初版本と見比べれば理解し易いかも知れないと、この本も購入した。本を借りる所というよりも、本を手にとって見つける場所として図書館を利用している。

学生時代には割とよく本（所謂、工学・理学の専門書）を買うほうだったように思う。本をよく読んだかという、そうとも言えない。買った本の3分の1程度は読み、3分の1はざっと目を通す位か精々途中まで読んだ切りで後は積読、残りの3分の1に至ってはただ飾ツ読に過ぎなかった。それでも辞書程度に役には立ってきたように思う。よく云われることであろうが、一度読んだ本が大切だ。どの本のどの辺りに何が書かれているかを知っていて、初めて外部記憶としての用を為す。外部記憶が手の届く範囲にないと、情報を取り出すことが出来ない。手許に確保しておかないと、いつ消去（絶版）されてしまうか分からない。

これまで幾度か失敗した経験がある。図書館で借りて読んだ本がいい本だった。手許に置いておかねばと思いつつ、既に読んでしまった本を飾っておく

ために高額の出費は躊躇された。その内に買おうと思っている間に月日は経ち、気が付くと絶版になっていた。その本が手許にあれば役立つ機会がその後に何度かあったが、残念なことをした。センサー工学の本だったが既にタイトルさえ忘れ、外部記憶ならぬ只の思い出になってしまった。兄が割と近い分野にいたので、借りて読んだ本もある。長く手許にあつたので自分の物のように思っていたが、随分後になって取返されてしまった。既にその時点では新たに入手出来なくなっていた。名著と云われ、いつか読みたいと思いつつも購入せぬまま絶版になってしまった本も沢山ある。尤も、これらを買っていても、ただ飾ツ読になっただけかも知れないのだが。

「いい本」は手許に置いておきたい。名著と名高い本の多くは「いい本」だろうが、そうでなくても「いい本」は沢山ある。論理回路の初版本で誤植が多く、多少大袈裟に言って1ページに1つは間違いが見つかるような本があつた。全ページが演習問題のようなもので、お陰で内容がよく理解出来た。お薦めの本の一つであつたが、第2版以降も「いい本」かどうかは疑わしい。「いい本」かどうかは読んでみないと分からない。しかし、買わずに読んでしまつて、その本がもし「いい本」だった場合には始末に困る。新たに買おうか買うまいかの心の葛藤は読む前の何倍にも倍加し、優柔不断な自分を嘆かねばならないことになる。買って見て「いい本」に当る確率は宝くじよりは高かろう。たとえ外れてしまつても、本棚を賑わす位の役に立つ。「本は迷わず買う」。これは、書店に行く度、常々自分に言い聞かせていることである。 (工学部 助教授)



「大学図書館の組織改革と近代化」のための提言

山 崎 良 平



「テーマは何でも良いから1500字程度で書いて欲しい」という依頼を受けましたが、図書館館報100号記念ということなので、図書館の環境改善について思うことを書きます。5年前位に、一度、図書委員を引き受けたことがあります。日本の大学図書館の歴史、組織、現在置かれている環境を良く理解しているわけではありませんので、誤解や論点が間違っていることがあるかもしれません。もし、そうであれば、指摘頂ければ幸いです。

数年前に図書委員を引き受けて、驚いたことは、図書館が独立した形で予算を持っていないということです。殆どの国立大学がそのようです。大学予算から振りあてられた限られた金額で、学部と大学院学生、あるいは、各研究分野を対象とした図書の購入、そして、図書館が提供する検索、電子図書館関連のサービスを苦労しながら行っています。図書館が学部学生、大学院生（修士、博士課程）の「自習する場」という考えならば、今のままで、何とか「その場の確保という最低限」を満たせるのでしょう。しかしながら、「教育と研究の両面で学生と教官を支え、更に、公共への情報提供の場」として位置づけられている欧米の図書館と比較すると、今の現状は、寂しい状況です。

図書館の利用者として、欧米と日本の大学図書館の「格差」を経験するのは、電子図書館に象徴されるような電子媒体を扱う部門です。アメリカでは、データベースの構築等の事柄は25年以上前から始まっており、今では「Informatics」という新しい学問分野にリードされた形で、電子媒体時代の図書館の構築が行われています。勿論、日本でも、電子図書館の構築が数年前から始まっており、モデル校として独立した電子図書館を持たない大学でも、検索や科学の専門誌へのオン

ラインアクセスをより良いものにするための努力が行われてきています。しかし、日本では「Information & Technology (IT)」を支える内実が脆弱であるという社会的な環境も要因としてありますが、独立した形で予算をもてないことに加えて、その運営と意志決定も独自で行えないということが、大学図書館の充実を遅らせているようです。

今でも、殆どの国公立大学の図書館では、図書館長は学部の教授が担っています。そして、そのような図書館長の多くは、60歳前後の方で、外国の図書館で「Informatics」がどのような形で活用されているのかわからない方が多いようです。また、図書館改革のための立案、作成は、「図書館学」を専攻しその経歴を積んだ方でなく、事情に精通し始める頃に転任となる、「専門家」として育つことのない「事務」方が行う場合もあるようです。そして、図書館の意志決定は、図書館長と各学部代表の図書委員会によって行われます。このような状況では、対処法的な決断はできても、図書館の使命、目的、ビジョンを明確化できるような人の輩出、そして、そのような人の独自の意志決定を可能にする組織の構築はできるとは思いません。

これからの図書館を考えると、優秀な図書館員の育成と共に、「IT」を担っていく人間を育てる必要があります。コンピューターのハード、ソフトウェアに精通した人間、C++やJAVAのような言語でプログラムを書ける人間、あるいは、データベースの活用に必要なInformaticsを学んだ人間が必要です。新しい媒体が作り上げる分野は新しい世代に任せて、そして彼らが育っていくような環境を構築する必要があります。そして、実質的に図書館の事柄に経験を持ち、更に、行政能力、決断力、ビジョンを持つ方が図書館長となり、その館長のイニシアチブの下に意志決定できるような組織構築が必要だと思います。このようなことが可能になることにより、これからの図書館の改善と同時に近代化ができるのではないかと思います。図書館は、大学での社会科学、自然科学の教育、研究にとって必須のベースです。このような「ベース」をより良くできるように我々教官も支援していく必要があると思います。 (農学部 教授)

掛け軸と図書館

久野 木



正門をくぐり鬱蒼(うっそう)たる樹木に覆われた本学図書館に入ると、ホールには、狩野派を学んだ池田慶行公の馬の絵とか根本幽峨などの亀の絵の掛け軸が展示されています。近頃では図書館に展示があるのは珍しいことではないし、図書館協議会が巡回展を企画するまでになってきましたが、平成7年当時しかも軸物が常設展示されているのはまれなことだったと思います。

橋本秀峰の馬に勝るとも劣らぬこの馬は公14歳の作で、膂(りょ)力あり文武の才長けて、四書五経をも修めたと思われ、17歳で逝去するまでに詩稿一卷あるといひます。ともあれ“モノ展示と情報”もどきに関わっていた私どもには、このような展示光景がいつそう新鮮に映ったものでした。

昨秋、ホームページで高阪館長はこれら郷土関連資料や貴重書のデータベース形成と、主なものの画像データベースを整備公開しつつあるとされています。郷土性豊かなこれらの資料が公開展示されれば、新たな史実発見と再評価の契機を提供するに違いありません。

<図書館と展示>

モノの展示というのは、図書(文字)のみとは異なり、「モノ」、「言語」、あるいは「絵(画像)」を内に秘めて、“総合的な”情報伝達を行うといひます。図書が編集印刷製本の形で提供されるように、展示も展示学としての編集技術が加えられます。しかし文字が伝達の内容を規定する傾向があるのに対して、展示による情報伝達はそれ以上に自由でイメージ豊かな解釈が可能であり、観る側と双方向的作

用も起りうる。また、展示はなごみ・癒しとしても効あるといわれるので、図書館にほどよい規模の展示があることは予期以上の意義があると考えます。先の創立50周年記念事業の一環で開催された本学関連資料の展示には、文献収集の労あって、かかる点でも誠に印象深いものであったと記憶しています。

<その後のこと>

わが国も大学博物館が整備される傾向にあるなか、図書館の展示空間は十分ではありません。その点、海外の先進大学図書館には、歴史的な文献資料などを展示する特別室を設けているところが多く、そのひとつに韓国国立慶北大学校の新中央図書館があります。旧館は博物館に転用していました。

更に、当館は昨年9月大改革により研究用図書をすべて図書館内に配置、図書発注から利用に供するまで10日以内を実施していると聞きますし、図書館長の裁量権限が甚大であることも分かりました。図書館を大学の総合情報館あるいは「博情報館」(梅棹忠夫氏)の位置付けで整備している例であり、よい器と同様資料整理とモノ展示の意味を改めて思い知らされることでした。

翻って、その後の本学図書館は館長、館員各位の更なるご努力で、多様な図書館機能の高度化を推進しておられることは喜ばしいことです。国立大学の独立行政法人化を目前に、今後ますます発展活躍されることを願ってやみません。

館報発行100号を記念するになお不足の拙稿をお届けし、その責を果たしたく思います。

(前広島大学附属図書館事務部長)



学生と図書館

—鳥大図書館の発展を祈念して—

田村 智



鳥取大学附属図書館では農学部の甲元先生、工学部の木地先生のお二人の館長にお仕えいたしました。私自身は非力でありましたが、両館長のご指導のもと館員の方々のご協力をいただきながら、また学長、事務局長はじめ関係の皆様のご理解や、ご支援をいただきながら仕事に従事することができましたことを深く感謝申し上げます。

図書館は言うまでもなく大学の教育研究の支援機関の中でも重要な役割を担っているものの一つですが、先生方との関係でいえば研究用図書、外国雑誌の購入事務や複写などの事務がどちらかといえばウエイトを占め、購入請求された図書なり依頼の複写物をできるだけ速やかに引き渡すことが求められているのが一般ではないかと思われます。また、退官時に資料を図書館へ返却する際の事務なども挙げられるでしょうし、目下は研究に不可欠な電子ジャーナルの導入や各種電子学術情報の発信を含めた機能整備などが重要な課題であると言えます。

一方、特に若い学生にとって授業に関係して又はしなくても様々な図書館資料を利用して勉強し、学習をし、関心を持つ事柄について知識を深め、社会に出たらかえって失われがちな読書や調べごとをすることの喜びや愉しみを学生時代の自由な、知的好奇心の旺盛な間にこそ味わい、身に付けることは大切である筈ですので、図書館はそうした環境を十分に提供する役割を

求められていると考えられます。試験の時だけ図書館座席を利用する、普段はあんまり足を向けないという傾向が共通にあるにしても、学生にとって魅力のある、足を向かわせる図書館とはどんな図書館であろうか、そうした図書館づくりに様々な角度からこれまで以上に具体的に取り組む必要があると思われます。

多くの大学においては附属図書館の蔵書であっても図書館（本館や分館）に配置されるのは一部であり、アンケート等においても資料が古い、専門分野の図書が少ない、新刊書が少ないという声が多くもたらされます。一層の財政的配慮を大学当局に願わずにいらませんが、それとともに効果的な選書や効率的な目録整理等に関しこれまでの在り方の抜本的な見直しをし、その上でより利用者（学部生や院生）一人一人と緊密に結びついた内容の濃いサービスの展開を目指すことで改善や発展が見えてくるのではないかと考えます。研究費で購入された研究室貸出資料を図書館配置資料と同じように利用することはなかなかできないのが現状です。例えば冊数制限を課し越える分については図書館に返却する、図書館は重複資料を整理し、スペースを確保するなどの手立ての上、全学の蔵書を大学全体の資産として構成員が少しでも有効に利用することが可能になればと思います。また、郷土資料のような地域特有の資料の充実は学生にとっても地域貢献の上からも大切ですが鳥大では旧鳥取藩所蔵の貴重な典籍・書画類を大切に保存し積極的に公開しておられることは素晴らしいことだと思います。元職員の一員として館報100号記念のお喜びを申し上げますとともに法人化後も鳥大図書館がますます充実・発展されることをこころから祈念いたします。

（一橋大学附属図書館事務部長）

本学図書館への警鐘

東海安興



本学の図書館報が誕生した昭和45年4月は私が長崎大学職員になって1年を経過したころに当たる。当時の大きな事件として社会を賑わしていたのは東大安田講堂事件、人類初の月面着陸、よど号ハイジャック事件である。私が大学図書館に携わって、おおよそ30年の年月が経過したが、この間に4つほどの大きな出来事に遭遇することとなった。

一は私が図書館職員になった昭和50年始めの時期は図書館業務への小型計算機の導入が開始された頃である。旧文部省の予算措置によって特定の各大学図書館へ個別に開発を奨励した時期でもある。従来からの人手（マニュアル）作業にコンピューターを活用して図書館業務へ導入したことは図書館界にとって画期的な出来事であったと言える。

二は急速に進展する情報処理技術に対して個別開発は限界があり、その対策として昭和55年に「今後の学術情報システムの在り方について」の報告書に基づいて、学術情報センター及び学術情報システム等の構想が国の施策として進められたことは周知のとおりである。その結果、多数の大学の参加による図書雑誌等の書誌情報の共同目録作成が可能になった画期的事業である。本学は平成元年にネット接続を行い、平成3年に図書目録システムに参入している。個人的なことであるが、私も昭和61年に半年間、学術情報センター（現 国立情報学研究所）の学術事業に参加できたことは感慨深いものを覚える。

三は平成3年の大学設置基準の大綱化に象徴される平成初期の大学改革である。各大学に自己点検・評価の義務づけが課せられた。図書館機能の充実や図書館職員などの位置づけが明確になったことは大いに評価されるものであり、本学の図書館活動もこ

れを機に盛んになってきたと言っても過言ではない。

四は21世紀を迎えたこの2～3年、小泉行政改革の一環として、大学の法人化も平成16年度（2004.4）に決定している。特に私が杞憂しているのは法人化後における大学図書館の存在意義や図書館機能やシステムを厳しく問われることである。図書館関係者は既成観念を超えて認識を新たにしたい方がいい。何故このような状況になってきたのであろうか。それは今日まで大学構成員によって正当な評価を受けてこなかった結果による、謂われもない過少評価、誤解等が大きな要素となっていると憶測している。

そこで私の個人的見解と前置きして、この誤解を払拭したい。いつの頃からか、電子図書館というキーワードが出現するようになって、良く見聞きするようになった話題や言葉がある。図書館否定論としては図書館無用（不用）論や消えゆく図書館等、図書館肯定論としては図書館の生き残り作戦や図書館改造論等が挙げられている。これらに共通する点は図書館自体の役割・機能が問われていることである。

このような時機と同じにして、国立大学は法人化に向かって未曾有の大変革（変貌）を要求されており、下手をすると大学自体の存立が危うくなってきた。戦後の新学制により、国立大学が設置されたのであるが、その設置法第6条で国立大学も附属図書館を置くことと規定されていて、法律の加護のもとで運営されてきた。その経緯からして、現在までの図書館関係者はその時々で最大限の英知をもって対処してきたのであろうが、今日、なぜ大学における図書館の役割やその効用が疑問視されているのであろうか。現在、社会通念上は大学設置基準に図書館の役割が定義されていて、教育・研究等における学術情報支援機関以上の基盤機関としての認識は国内の国公立大学はもとより先進外国の大学にも共通することは異論のないところであろう。本当に問われていることは何か。図書館関係者は現実を直視して、今後の大学図書館は大学でどのような役割と責任を持つことができるかという点を検証しておく必要がある。本学図書館の発展を願う一人として、特に警鐘をしておきたい。（本学附属図書館事務部長）

今回、本学附属図書館報、100号記念号の表紙を飾る図は、当館が所蔵する「大型コレクション」のひとつである「GAZETTE DES BEAUX-ARTS. Series 1-6.」1859-1982. (ガゼット・デ・ボーザール。オリジナル。)の創刊号(表紙)から抜粋したものである。昭和61年度大型コレクション「ガゼット・デ・ボーザール」(旧文部省配分)は、シャルル・ブラン(Charles Blanc)の手により1859年のパリに創刊を見た世界的に定評のあるフランスの月間美術雑誌である。西洋美術史研究はもとより、広く美術研究全般に不可欠の雑誌である。当館では以後のものについても継続購入している。

鳥取大学附属図書館報 第100号(2002年12月発行)

編集・発行：鳥取大学附属図書館 〒680-8554 鳥取市湖山町南4丁目101 ☎0857-31-6727

ホームページアドレス <http://www.lib.tottori-u.ac.jp>